英国 野外博物館を訪ねて

江戸東京たてもの園は１９９３年（平成５）に開園し、
今年で２３年目を迎える野外博物館です。
世界には多くの野外博物館がありますが、
その中でも、今回は英国を代表する４つの野外博物館を紹介します。

写真 2

写真 1

江戸東京たてもの園は開園20周年を記念して、平成25年3月23日、スウェーデンにある野外博物館の雄・スカンセン野外博物館からCEOヨン・ブラットミュール氏を、オランダアーネム野外博物館からは館長のピーター・ガイスバース氏を招き、シンポジウムを開催しました。

翌年の平成26年3月27日には、「江戸東京たてもの園30棟完成記念シンポジウム これからの野外博物館Ⅱ」開催にともない、北米カナダの野外博物館・アッパー・カナダ・ビレッジのブルース・ヘンベスト氏を、オーストラリアのソブリン・ヒルからCEOのジェレミー・ジョンソン氏を招き、海外の野外博物館との交流を進めてきました。

このように江戸東京たてもの園は北欧、北米、欧州と、海外の野外博物館との連携を深めてきました。今回、野外博物館の持続的発展を考えるため、これまで交流のなかった英国とコンタクトを取り、その代表的な野外博物館四施設（うち三つはチャリティーと呼ばれる非営利の財団が運営する野外博物館と、一つは国立の野外博物館）を学芸員の田中裕二と研究員の米山勇が訪問しました。

チルターン野外博物館 写真 1

ロンドンのメリルボーン駅から北西に電車で30分ほどと野外博物館の立地としては比較的恵まれた環境にあります。1960～1970年代にかけてロンドン近郊の開発が進んだことから、伝統的な建造物が破壊される現状を憂い、チルターン地方に限定して建物を地区保存するため1976年に開園し、現在は34棟の建物を移築保存しています。設立当初は建物を救うことを第一に掲げていましたが、現在のミッションはやや変化し、家・人・景観を一体として保存しチルターンの長い歴史を物語ることに重点を置いています。チルターン地方特有の動植物も建物とともに景観展示しているのが特徴的でした。

ウィールド・アンド・ダウンランド野外博物館 写真 2

ロンドンのビクトリア駅から南へ電車で1時間30分、チチェスター駅に到着。ウィールド（平地）とダウン（丘）という地形に由来する地名を持つこの地方特有の失われゆく建造物を保存することを目的として1970年に開園し、現在50棟ほどが移築されています。この博物館の特徴は三つあります。一つめは、建造物に関わる大工道具や古民家の部材、建具など約1万3千点を収蔵展示している収蔵庫があることです。資料のweb上の公開はまだ行っていませんが、写真撮影を進めデータにリンクさせる資料整理を地道に行っていました。

二つめの特徴は、歴史的建造物の技術や技能を伝えるためのワークショップを行う広大な専用スペースを有しているところにあります。三つめは、主に学校団体向けに伝統的な大工道具や使い方をパネルで展示した教育普及のためのラーニング・センターもあることです。歴史的建造物の技術を伝承するための環境づくりにも非常に力を入れていることがわかりました。

エイボンクロフト博物館 写真 3

ロンドン・ユーストン駅からイギリス第二の都市とも呼ばれるバーミンガムを経て、電車で約2時間。1967年開園と約半世紀を経た、野外博物館の中でも歴史ある施設です。32棟の歴史的建造物が移築保存されており、江戸東京たてもの園の30棟と移築数は近いですが、敷地はたてもの園の約5倍、東京ドーム8個分ほど。移築されている風車を実際に動かして、小麦を挽く動体展示も行っているのには驚きました。

写真 3

写真 2

写真 4

エイボンクロフトも、ここまで紹介してきた二つの博物館と同様、チャリティーと呼ばれる非営利団体が運営しており、英国宝くじ基金などの外部資金の導入を図り、経営資金の獲得のためファンドレイザーを臨時で雇っており、日本の公立博物館とは経営資金の獲得方法が異なっています。

セント・ファガンズ国立歴史博物館 写真 4

ロンドン・パディントン駅から西へ電車で約2時間30分。ウェールズ地方の国立博物館群七施設の一つ、野外博物館部門がセント・ファガンズです。プレマス伯爵からセント・ファガンズ城と土地がウェールズ政府に寄付されたことがきっかけとなり、国立の野外博物館として開館し、現在はウェールズ地方各地から移築された40棟を超える歴史的建造物を保存し展示公開している欧州でも有数の規模を誇る野外博物館です。開園は1948年と今回訪問した野外博物館の中でも一番歴史があり、知名度も高い博物館です。開館当初は有料でしたが、2011年4月に入場料が無料化され、訪れる来館者数が有料時と比べて約2倍になったそうです。ただし、国立の野外博物館で名を知られているとは言え、既に紹介した三つの野外博物館とともに、英国人の間でもまだ知らない人が多く、どこも知名度の向上には苦労しているようでした。

今回は紙面の都合で英国野外博物館の概要のみを紹介しましたが、次号47号では英国野外博物館に収蔵されている建造物についてご紹介する予定です。なお、さらに詳しい報告を今年度末に刊行予定の『東京都江戸東京博物館紀要 第6号』に掲載しますので、こちらも併せてご覧ください。

（学芸員　田中裕二）